

## まど・みちおさんインタビュー

(2000年6月5日、8月2日)

童謡「ぞうさん」「やぎさん ゆうびん」「ふしぎな ポケット」「一ねんせいになつたら」などで知られる、詩人のまど・みちおさん(当時90歳)。まどさんのもとを、詩人で、につけん教育出版社代表の小野忠男さん(当時54歳)が、詩人の尾上尚子さんと共に訪ねました。



まど・みちおさん 小野忠男さん  
(2000年6月5日)



小野忠男さん、まど・みちおさん  
(2000年8月2日)

### まど・みちおさん、詩について語る

\*なるべく人が使わない言葉を使いたい。新しい擬音で、しかも、しっくりいくものが良い。人によって感じ方が違うから、普通とは違ったものを使いたい。

\*ある学校の先生の集まりで、先生から私の詩について「こんなのダメだ」と言われたことがある。「今まで使われたことがないから」という理由で「違和感を感じてダメだ」と言われた。しかし、私は今まで使わ

れた言葉以外にどんな表現があるのかをいつも考えている。

\*誰も考えたことのないものを表現したい。それを感じ取ってくれる人がいたら嬉しい。例えば、「黄色」を題材にした詩があって、「なのはな」や「レモン」の黄色の他に、「ひばりのおしゃべり」を加えた。つまり3つのうち2つはみんなの知っているものを入れて、私の感じた新しいものを1つ加えている。「黄」という題で、私と同じように感じてくれると嬉しい。

黄

と なづけられた

きひんある そのいろは

たとえば

天からの ひばりのおしゃべりに

みわたすなのはなに

てのひらの レモンに

ほこりたかく いきづいている (以下略)

\*10人中10人で感じ方が違う。カッコウの鳴き声も「カッコー」だけでは飽きてしまう。物足りない。人間は同じことをすると飽きる。どんな好きなものでも、10日、1ヶ月も食べ続けると嫌になってしまう。五感

に対する刺激もいつも同じだと嫌になってしまう。飽きるという感覚を他の動物も持っている。飽きるという感覚を持たせてもらっているという事は、意味のある素晴らしいことだと思う。

## まど・みちおさん、詩とボケについて語る

\*子どもの頃は、音楽と図工が甲だった。他はみんなダメだった。雑誌『赤い鳥』も読んだこともない。

\*自分もだんだんボケてきて、靴を履こうとしたら履けないのでどうしたのだろうと思ったら、右足を左の靴に入れようとしていた。また、靴下が一足ないのでベッドの下など部屋中探し回ったが、見つからないのでおかしいと思ったら二足重ねて履いていた。

\*ドアに指をはさんでバンドエイドをつけたが、間違えて左右別の手の指にバンドエイドをつけていた。医者から「赤っぽい動脈はバンドエイドをつけてはいけない、つけて良いのは黒っぽい静脈だ」と聞いた。挟んだ指は動脈の方だったので、間違えたのがかえって良かった。

\*99歳の父親が死に際に「今日は何日だ？」と聞き、それが父親の最後の言葉であった。今私は「今日は何日だ？」としょっちゅう家族の者に聞いている。父親との遺伝の強さを感じた。父親は風邪をひかなければ

99歳よりもっと長生きしたと思う。

\* 落とした物を拾おうと思って、おでこをテーブルにぶつけた時は、頭を金槌で殴られたような気がした。金槌に叩かれたらテーブルがへこむけれど、頭にはこぶができて膨らんだ。

\* 詩も私と同じでマイナスをプラスにするもの。ボケのおかげで家庭内に笑いが起こる。「サッチャン」の詩で有名な詩人の阪田寛夫さんは、勉強のしすぎで頭の固い人だと思ったが、ガスを消し忘れることがあったりして面白い人だ。

\* 私は詩人といっても、駄作があまりにも多い。書いては直し、書いては直し…。詩を書いて本になった後でも直したくなることがある。

\* 天才的な詩人だったら一回で完成ということがあるかもしれないが、私の場合、こんな状態だからいつも詩を書こうという気持ちがいつまでも持てるのだろう、と思う。